

Key to the future people can change



未来への鍵

■ パース国際会議報告 ■

人は変わることができる

一八二九年、キャプテン・ステエアリングに率いられた最初の白人達がスワン川の砂浜に上陸しパース市を築いた。本年、西オーストラリア州は百五十年を祝う。その式典行事の事始めとしてMRA国際会議が十九ヶ国二百余名の参加をもって開催された。さかのぼること実に四万年前に既にこの大地を発見した原住民アボリジニーの長老が、伝統に則った槍投げの儀式で一行を歓迎した。

三十余年に亘る最長議員歴を誇り、議会の父として幅広く民衆の尊敬を得た元教育大臣キム・ビーズリー氏の司会で格調ある開会式が始まった。元海軍大臣でパース市長のチェイニー氏は開会の辞の中で、「個人の変革を基礎にしたMRAの運動は個人から国民へと広がりを見せているようだが、今日の社会及び政情をより良い方向に変えていく酵素の役割を意識しておられることを願う。」と述べた。

「国際児童年」をテーマにした教育の会議で、西オーストラリア大学教育学部のタノック教授は次のように述べた。「子供の教育がいかなるものであるかは家庭が決めるべきもので、学校や教師や国は家庭がその責任をとることを助けるべきであり、それをとり上げるべきではない。もし家庭が教育責任の中心であり、学校がそれを助けるようになれば当然家庭と学校とりわけ教師と親との間に特別の関係ができる筈である。良い親は子供が善悪の意味を知り、自らそれに基いて行動し、他人に対して責任をとっていくことを求めるものであり、これらの資質は自ら良い教師にも

見い出されよう。そして教育が順調に行われているということ、良い親と良い教師が共に手をとりあっているということである。今日の教育界が最も必要としているのは本物の教師である。それは、知識も技術もある人が、そればかりではなく、教え子のことを心から慮ばかり、よい模範となるような人のことをいう。すべての親が、そして子供たちが望むのは正にこのことである。」

この家庭の重要性を扱った「楽しくなる家庭」というテーマの会議に一家で参加したメイア夫人は家庭が機能するための五つの「C」を掲げた。

一、Communication 例え自分に都合の悪い時でも聞いてあげる用意。

二、Consistency (一貫性) 毎日同じ基準をもつこと。きょうはある基準、明日は別のということなく。

三、Comradship 家族内での同志的つながり。

四、Change 開いた気持と開いた心。

五、Contentment (内容) 遊ぶ時間、休む時間、家族間の交わりのある時間。

「国の健康——皆の責任」というテーマで、元厚生大臣、現在労働党アブオリジニー問題担当のエベリンガム氏は、家庭や教育の破綻から生ずる社会的弊に深いメスを入れた。

「健康とは我々誰もの責任である。何故ならそれは、誰もの責任であるところの社会の間違いの反映の全てであるから。これは又、知的、社会的、精神的健康の一部であり、福祉、教育、



アブオリジニー（原住民）による伝統的な歓迎の式典。平和をあらわす槍投げの儀式に続き、ユーカリの小枝で外国代表をさすり、健康、強さ、幸せを祈願した。

人格等を離れて健康に対処することはできない。我々は、経済的、技術的、政治的、国際的といったあらゆる計画の中に人間主義をくみ入れねばならない。そして、無神論も含めてあらゆる宗教観を含み誰もがもっている人間的側面にうったえる方式を探求すべきである。」

三十年前、オーストラリアの良心の存在証明はアブオリジニー対策にあるべきであるとの確信をコー（スイス）で得たキム・ピーズリー氏は、一貫してアブオリジニーの伝統、習慣、言語の保持に政治生命を注いだ。今回の国際会議は企画の段階からアブオリジニーと白人との手で進められ、アブオリジニー政策についての各方面の責任者がこの広大な大陸を横切って足を運び、連日テレビ、新聞を通してその模様が全国に報じられた。パース市長の子息でアブオリジニー省大臣のチェイニー氏。唯一人のアブオリジニーの国会議員ボナー氏。アブオリジニーの土地権利の問題を一手にひきうけるグラスビー氏（前移民相）。それに前出のエベリンガム氏等である。

この融合は海外からの代表の

和解のメッセージと共に会議全体を力強いものにした。インド人、中国人、マレー人の中の多民族国家に献身するマレーシアの青年。ニュージーランド原住民マオリ族の長老。インド東部山岳少数民族の代表。そして南アフリカよりの移民及びベトナムからの避難民などである。

かねてよりMRAに理解を示されている日本の榎垣総領事御夫妻、三菱商事の高森支店長、伊藤課長、メルボルの「スタディ・コース」受講者を代表した大阪の市座さん、そして青年代表の寒河江亮君などが国を代表した。南極観測船「富士」がいつも立ち寄るこのパースは、この会議を通し、我が国への単なる資源供給地でなく、未来を生きる人々の姿を示してくれた。「スタディ・コース」の外国からの受講者一人に奨学金を送る基金を作った労働組合もパースにある。この未来を担う人を支えるパースの人々こそが百五十周年の過去に浮かれることなく、世界に訴える、正に「未来への鍵」であるといえよう。

（藤田幸久記）

ジンバブエに平和を！

アーサ・カノデリカ師の死



「私は死を恐れない。いつかは誰もが死ぬのだから。重要なことは、死に直面したときに何を目的に生きてきたかだ。他人を喜ばせることは価値のないことである。私は白人を批判することで黒人から歓心を得ることがよくあった。そういう行為は人気のあることであったし、私自身、多くの追従者を得てきた。しかしどんなに多くの追従者を得たところでそれは価値のないことである。我々は神だけを喜ばせるべきである」これは昨年十二月八日の午後ローデシアは首都ソールスベリー郊外で強硬派ゲリラによって暗殺され、四十八才という短かい生涯を閉じたアーサ・カノデリカ師の言葉である。

暫定政府が樹立されたときは出納部長の地位にあり、かつメソヂイスト派、ソールスベリー地区議長でもあった。牧師とMRAの出会いは一九七五年のローデシア大学での会議であった。この会議で牧師は武力や憎しみによる革命よりも血を流さなくてもすむよい方法があると確信した。それはキリストの生きざまに従うことだった。そして牧師の信念は、政治的地位を捨てることではなく政治の中にもキリストを置くということであり、非常に困難かつ危険を伴うものだった。一九七六年、ジュネーブ会議が英国提唱のもとに行なわれたが牧師もNANC派遣団の一人として他派との橋渡しとして努力し、その中でアレック・スミス氏（イアン・スミス首相令息）との間に注目すべき友情が生まれたのだった。牧師はUANC交渉委員会議長として急進派ゲリラとの平和交渉にのりだしたのであるが、こうした牧師の行動は自分の派からも無遠慮な批判を受ける立場に立たされ、ついにUANCを追われる身となったが、氏は大胆に神の道を突き進んだのである。

中央メソヂイスト教会には黒人も白人も牧師の追悼会に集まった。「ハラレ」の牧師の教会は人びとで埋った。英国においても追悼会が催され、英国外務長官代行も出席した。その後



開かれた四百人にのぼる昼食会では卒直な会話が交わされたが、それはカノデリカ師の仕事が牧師の死をもって終っていないという確信であった。(中島竹司記)

ケイテイ・ウィー 博士を偲ぶ

ブックマン博士に会った際教えられた「神の声を聴き、それに従う」という生き方を実践した結果に他ならないとしている。彼女自身の言葉を借りれば、「フランクに会った時には私は校長で全て順調に行っているのに満足していました。彼が絶体正直ということについて話した時、私の心が動揺しました。というのは実際は学校のお金であるものを私のものであるかのように見做していたからです。静かな時間を持っている時、正直になるべきだ、そのお金を学校にもどすべきだと考え、それを実行しました。その時から私は毎日神の導きによって生きる生活を始めました。もし私たちがMRAのこの挑戦に会い、それが一

つの国の運命にどのような影響を及ぼすことが出来るかを知れば、それを受け容れることが出来るでしょう。」

ウー博士は常に中国人の将来、そしてより正直さと無私の精神に富んだ世界を築くための彼等の役割ということを考えていた。彼女はそのアパートと遺産をMRAの仕事を継続させるため、そして世界中の中国人にMRAのトレーニングを受けて欲しいということ、「ケイティ・ウー記念基金」を残した。彼女に寄せられた或る若い香港の教師からのメッセージは次のように結んでいる。『親愛なるケイティ、あなたは神の慈愛というものを私に示してくれた最初の人です。あなたを通して私は神のイメージを見ました。あなたの正直・純潔・無私そして愛という生活標準は非常に挑戦的でした。あなたの若い心はいつも他人を思いやり世代間に人種間にそして異なった主義にも橋を掛けようと心を砕いていました。親愛なるケイティ、あなたの精神を私は一生受け継ぎたいと思います。』

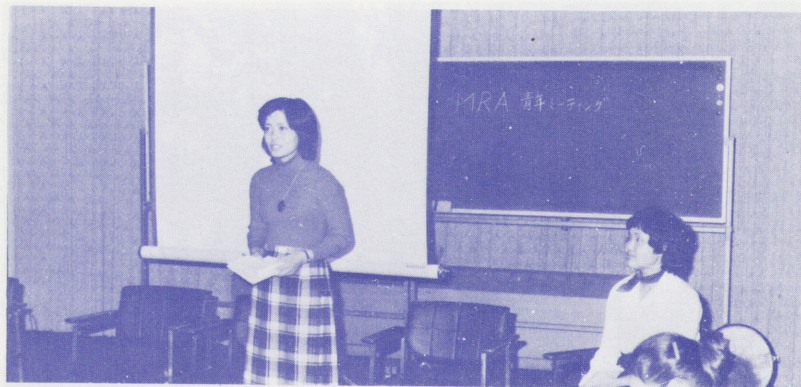
(長野清志記)



「自分たちは何をなすべきか」

起ちあがる青年たち

アジアセンターに集う



昨年十二月九日、十日の両日小田原のアジアセンターにおいてMRAの若い人の会合を持つことが出来ました。この会に参加した方がたは、今までコーに行つたことのある方、あるいは海外のMRAセンターにおいて活躍された方など約二十名が参加して行なわれ、海外からのゲストとして香港でフルタイムとして働いておられるディビット・バンタン氏、また現在啓明学園で教えておられるオーストラリアのグレアム・コーディナー氏などが参加して下さり、国際的な雰囲気の中で行なわれました。

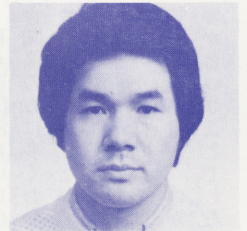
去年の十一月から毎月一回若い人の会を開くことが出来、その一つの会として三井様御夫妻の御協力とアジアセンターの御好意でMRAにゆかりの深い小田原アジアセンターを会場にできたことは、大変意義深いものだったと思います。

加された方がたによる説明と経験談を交じえて紹介されました。ゲストのディビット・バンタン氏は香港での体験とMRAの活動について、またグレアム・コーディナー氏は、オーストラリア人として日本の生活を通しての心の変化と感想を話して下さい、充実した夕べをすごすことが出来ました。

今回初めてのことであるMRAの唄やマオリ族の踊りの紹介なども私達の手によってすることができ、なごやかな中に会を進められたことは良かったと思つていきます。

翌日十日朝は「静かな時」をみんなで持ち次の三つのことをゆつくりと考えてみようということになりました。第一は、「最近自分が決心したこと」第二は、「私の心の葛藤」第三は、「世界で一番問題に思うこと」というもので各々の考えや、ガイダンスを朝のミーティングのときに話し合いました。その結果、色いろの方の考えや、生活を交換することができ、有意義な二日間を持ってたことに本当に感謝しています。

(住友奈津子記)



無気力な

若者なんていない

寒河江 亮

(現在オーストラリア滞在中)

つい最近までの僕の生活は、後悔をするまでとはいわなくても決して満足のできる生活ではありませんでした。なぜ満足できなかったかという点、自分自身のよりどころをもっていないかつたし、意志が弱かつたと思えます。仕事に関しても自信がもてず悩んでいるうちに逃避をしてしまつておりました。現実の問題を他にすりかえていたので

す。今から振り返ると自分は簡単なことすらやり遂げていなかったと思います。若者の無気力ということについていわれ始めて久しいと思えますが、僕は決して今の若者が気力をもっていないとは思いません。ただその気力を具体化する手立てが見つからず模索して

いるのだと思います。それが見つかれば決して無気力な若者などではないと思えます。水は高い所から低い所に流れていきます。しかし人間は高いところに登ることが出来ます。

自分達のもっている若さが下に落ちてしまふような人間にも歯止めをかけることを可能にするのではないのでしょうか。

そのようなことを感じまして、僕は今までの仕事を捨てて、自分自身の人生の転機をMRAにかけてみようと思つています。しかし僕はまだ神の存在を信じているわけではありません。観念的な存在は認めています。問題は神から何をしたらうかではなく神に対して自分が何をするかであると思えますし、自分

自身の心の声を聞けるかどうかであると思えます。その心の声を神と呼ぶことにはやぶさかではありません。

人間一人一人にとって一番重要なことは自分自身であります。自分自身の解決なくして社会の問題の解決もありません。いつも問題は自分の足元にあるということを実感しなければいけません。

その問題は自分が生きて行くうえにおいて、単に自分一人にとどまらないことも知るべきだと思います。これが最近考えたことです。



新しい考え方が

必要だ

桑原伸光

僕は今までの考え方とか今のレベルで物を考えていてはいけないと思います。科学の面でも試験管の中で生命のあるものを造り得るといふ科学力に達してきております。以前は神が行なうことを人間がし始めてしまっておりま。このことは世界中の大きな問題にしましても、われわれが神と同じレベルの倫理をもたなければ、もはやまがいしか起こってこないと思えます。前は人間であればそれによかったのです。しかし今はそういう自覚だけではいけないと思います。つまり神的な倫理をもたなければ人間は人間によって滅ぼされると思います。原子爆弾が良い例であります。こうした科学力で人間は人類を滅ぼし得るのであります。これから人間は自画自賛して生きていてよいわけがありません。もう一つ上の段階の人間性を要求さ

訪欧を終えて

住友昭郎

れるのであります。そうでなければ、アフリカの問題にしましても世界各国の宗教問題にしましても解決できないと思えます。ニューホモサピエンスとでもいまいましようか、意識の違った人間を現代は要求していると思えます。これはどの国の人かとか肌の色とかいうことは関係なく、観念の転換が必要であると思えます。これをなくして今のまま続けて行ったら、どの問題も解決できないと思えます。シテムよりも人間自体が新らしくならなければならぬという必然性が気が付かなければなりません。今までの人間が限界にきて、歴史の中で新しい人間が求められていると思えます。今までの人間が道具によって生きて参りましたように、これから人間は新しい考え方によって生きて行かなければ、われわれは生存できないと思えます。

昨年夏、スイスのコーで開かれた世界大会で二ヶ月間、その後、英国で三ヶ月間を過ごし、最後に再びスイスでのトレーニングコースに一期間参加して帰ってきました。

おそらくMRAに何らかの接触をもつ人なら誰でもが人間性の変革の必要性を感じるでしょう。そして同時に自分自身から変わるべきことも知るでしょう。ここまでは非常に容易なわけですが、ここで終ってしまう人が多いのではないかと思います。いま私たちがしなくてはならないことは、自分自身の変革を踏まえたくて「変わる」決意をし、一日一日と努力を積み重ねていくことではないかと思えます。

私が英国滞在中には、労働組合関係の方に多くお会いする機会に恵まれましたが、その中で私が一番強く感じたのは「何が正しいか」に向って進んでいく強力な指導者が、いかに現在必要かということでした。



前列右が真鍋さん

私がキャンベラのホームステイで学んだこと

真鍋隆子

(現在オーストラリア滞在中)

英語をよく理解できない私は最初とても悲しい思いをしました。話をしたくてもできない、そうした寂しさの中から私はいろいろな体験をし、四つのことについて学びました。

- 一、自分自身の心の整理
- 二、仕事をすることの喜び

- 三、人との対話の大切さ
- 四、有難うという言葉の重要さ。

一、心の整理

どうして人はいつも平静でいられるのでしょうか。私はよく心が乱れます。頭の中では一生懸命仕事をしよう、与えられるものに感謝しようとするのに、行動するとき気持ちが乱れるのはどうしてなのかとよく思いました。

そしてあるとき、心の中の対話からこうした答を得ました。

「自分のベストをいつもつくしやましい気持がなければ何も後悔したり恐れたりすることはない。人の目を気にして悩むことはない」と。

100%の信頼を与えた人からは、100%の信頼が自分に返ってくる。とある人から教わりました。ほんとうにそうだと思います。

心の平静は自分で保たなければいけません。そのために疲れているなら早く取り去り、暗い気持をいつまでも持っていてはいけません。

寂しい時、悲しい時、ちょっとした親切に対しても涙がでるほど感謝しました。人の気持がとて有難く思えました。その気持をいつも私の心にいだいて

いたいと思います。そして、悪い事、気持の乱れる事をした時は、良心ががめて平静でいられない。だからそれに対して「ごめんなさい」と言おう。

二、仕事をやる事のよろこび

「仕事は与えられるものではなくて自分で見つけてするものだ」と聞いていました。でも私はよくわかりませんでした。何故“、”どうして“、”こんなに仕事があるの“この疑問について私は学べました。

ある日、掃除機をかけていて「どうして私はこんなことをしなければいけないの」と、内心したくないという気持で「でもしなければ」と暗い気持でいると、とてもすることが辛くなるのです。私はフツとなげなく「何故自分はイラ立っているのか、家族ならば当然ではないの」とささやかれたように思いました。それからとはとも気持が楽になり与えられた仕事ではなく、自分でやる仕事と考えるようになったのです。

こんなこともありました。シルバー食器を招待するゲストのために磨いていた時です。私はその時、手紙を書こうと思って

いたので、「今するのはイヤだなあ」と思う気持と、「今してあげばいつか役にたつ」という気持と半はんでした。でも家の人は昼寝をしているのにどうして私達だけが今しなければいけないのかと思うと、したくないという気持が強くなり腹立たしく思って磨いていました。するとシルバーが全く光らないのです。私は光らないシルバーを見て「どうして光らないの。早く済ませたいのだから光って頂だい」と祈るような気持で磨くこ

とだけを考えて一生懸命したら、きれいに光ったのです。自分の両手することは心をこめて何でもすることによってそれだけの喜びを後から得ることができると。その喜びは何ものにもまして感謝できること、進んですることによって喜びが得られ、またいつの日か役立つことができるのです。

三、人との対話の大切さ

私は今まで自分の考えを人に話すことはありませんでした。ひとりりで悩み、ひとりで解決していました。でも人と話することによってその中から、自分によりよい道を選び出せること

を知りました。

ある特定の人には話せるけど、この話はその人には話せない。なぜなら聞かれたことを恐れるから。」と話したことがあります。でもそれは間違っていると言われました。相手がどう思っているかは話してみなければ決して何が正しいかは見つけられない。そのためにも相手と話し合うこと、人との対話は大切であること。

四、ありがとうという言葉の大切さ

人間は人からほめてもらうために必要なことをするのはないけれど、自分の最善の努力を注いだことに対して「ありがとう」と言われることはとても嬉しいことです。この言葉によって本当に心をこめてよかったと思うのです。

あるとき、二人でお菓子を焼いていたときの話ですが、ゲストのために二人で作ったのに私には「ありがとう」という言葉が与えられなかったのです。寂しく思いました。「ありがとう。あなたはほんとにお上手ね」と相手の人に言っているのに私はずっとでもジェラシーを持ったのです。そのときに、私は人は誰で

も「ありがとう」の言葉が好きで心からそれを望んでいると思いました。本当に大切にしたい言葉のひとつだと思ったのです。私は自分の体験によってこれらを身につけられたことにとっても感謝しています。そしていつか何かのあたりで私の将来に、人生に役に立つと思います。

これらのことを学ばせてもらったランカスター家に対してとても感謝しています。そして必ずこの親切を返せることができると思うのです。

二十歳の門出を

清掃行進で迎える

去る一月十四日、茨城県日立市で、今年成人式を迎えた二千三百八十人のうち有志約四十人が参加して、「これからの社会への参加をまず自分たちの住む街の浄化から始めよう」と、ボランティア清掃行進が行なわれました。

これは同市が十四、十五日の両日に渡り催した成人式「二十歳の祭典」の一環として行なわれたもので、「社会人としての責任を自覚し得る意義ある成人式を」と昨年十月来より実行委員によって企画されたものでした。

この行進には昨年暮れ、オーストラリアから一時帰国した同市の星玲子さん、オーストラリア、シドニーから来日し、現在東京の啓明学園で国際学級英語の教師として教鞭をとっているグレアム・コーディナーさんも参加しました。

星さんは、一昨年の四月よりオーストラリアに渡り、MRAのトレイニングセンター、アーマで「効果的な生活の実践」を目標にした青少年の第一回目のトレイニングコースを受けたあと同センターで台所の責任をとって現在も元気に活躍中です。

この二月三日に次回のスターディーコースの準備のため渡濤しました。



世界の親善に

努力したい

藤田 彰子

(現在オーストラリア滞在中)

私はながいこと家庭の主婦をやっていた平凡な女です。子育てが終わり、フト気がついたらすでに老境に入っていました。

私たちの子どもの頃は、両親に服従、嫁しては夫は勿論その両親に服従するよう教えられました。こうした年代の私の目から見てもアーマでの生活を通しふだん考えていることを述べたいと思います。

お米やパンはそれ自体おいしいものではありません。しかしなくてはならないものです。妻とはそのようであると、思っていました。主人が働いて得たお金を有難く頂き、それで生活すると教えられてきたからです。しかし、この考え方は第二次大戦後改められました。妻とは家事労働、子供の家庭教育という重要な仕

事をしていくということが認められ、評価されるにいたりました。

ところで、こちらの女性は日本の女性と違って役目が大きいようです。料理、洗濯、育児の他に、接待という大事な仕事があります。最初から最後までテーブルについて男客と一緒に話題を持ちます。日本の場合、男性客が来た場合、少しは女の人も話をするけれども、男の話についていけない場合があるので、引込んでしまうことがあります。また質問応答が実にうまい。こうした点はこちらの女性が数倍も上である。さすがに男女平等と感心しています。

日本の女の人も真の意味の社交術を学ぶべきであります。また、時間を上手に使うことも教えられました。これは日本の女の不得意なことです。

日本の男性は必要以外のこと

はあまり言わないように教育されています。普通、たいいてい人は、勤務先のことあまり言わないから女の人はよく解りません。男性は職場で、神経と体力を費すゆえ、家庭は憩の場でありたい。家に戻った時は、お山の大将で君臨していたと思

うらしい。私自身それは当然のことであると考えていたから、主人に対してつくしてきたつもりです。翌日まで少しでも疲れがとれるように努力しました。

日本の男性は妻に対して「お前を愛しているよ」などとはいわないようです。私も一言もいわれたことがありません。しかし何年か経つ間に信じ合うようになります。彼が今、何を考えているのかも分かり、今日は職場で不快なことがあったらしいことも分かるようになります。ただ、彼が死ぬ二日程前に、かな声で「お前には随分と世話になったなあ」といいました。私はその言葉にすべての苦勞を忘れしました。

しかしいくら信じ合っているも、お互いに元気な間にこうした言葉が欲しいと思うのは女の

気持でもあります。その点、オーストラリア、欧米人は表現が豊かで良い習慣と思います。常に男の人が女の人をいたわっている光景は大変立派だと思

います。また毎回の食事のとき「実においしい」という言葉が必ず出ます。これは作った人に対しての労いの言葉であり、美しいことだと思。ほめられた人も、一層努力して次の機会に、もっとおいしいものを作ろうとする意欲が湧くことと思います。

週一回のミーティングに出ています。途中で話を折る人がいません。したがって、話す人も話し方が上手になっていきます。話の内容も充実していき、これも日本の婦人の集まりでも学ぶべきだと思います。日本人は話の聞き方がへたです。それゆえ話し方がへたです。感情的にけんかになるか無口になることが多くて、結局家庭でも女は「物をいわない方がよい」という習慣になったものと思

ブックマン博士の「人は誰でも変わることが出来る」チエンジという意味を、私は初め日本流に考え、昨日までの悪人が、ある日善人に変わるという意味にとり、これは自分のできることでないと思

しかしこれは、その人なりの考え方の改善過程を自ら苦勞して体得するものであることを学びました。

蟬が鳴いて緑の並木の美しいお正月。夏なのに汗の出ない事。澄んで真青な空、南風が寒くて北風が暖かい。自分は今、南半球に居ることをつくづく感じます。

ここには世界からいろいろな人がきて、身近なお話を伺えます。日本での出来事は、ゴッップの中の嵐にすぎないこともわかりました。言葉のできない私に忍耐強く親切にして下さる皆様に毎日感謝の気持ちでいっぱいです。そして「日本人は信用出来ない」「エコノミックアニマル」の汚名を少しでも解消し、世界の親善に努力したいと思